

映画監督アナス・トマス・イェンセンの作家性
- 『アダムズ・アップル』の映画分析を中心に-
米澤麻美

1. はじめに

本稿は、デンマーク出身の映画監督アナス・トマス・イェンセン(Anders Thomas Jensen 1972-)が制作した映画の各要素がどのようにデンマーク国内外に働きかけているのかを明らかにするための準備的考察である。本稿では、イェンセンによって制作された『アダムズ・アップル』(2005)をウラジーミル・プロップが提唱した「昔話の形態学」のモデル¹に基づき、映画の形式、登場人物の機能、モチーフを分析し、この映画の特徴を明らかにする。

ここで、日本におけるデンマーク映画に関する先行研究を確認しておこう。デンマーク映画の先行研究は数が限られているが、大きく分けると2種類に分類される。一つは、特定の監督を扱った研究である。この代表としてカール・ドライヤー研究の小松弘²があげられる。もう一方は、デンマーク映画全体を概観した研究であり、この代表として1910年代から2000年のデンマーク映画の特徴を指摘した西村安弘³があげられる。そして、西村によって指摘された「デンマーク映画の特徴」が個別のデンマーク映画(ビレ・アウグストの映画)にも適応できるということを示した橋本淳⁴は、両者の中間の研究といえよう。

本稿は橋本に近い立場をとる。しかし、西村によって指摘された「デンマーク映画の特徴」を再確認するというのではなく、あくまでも「イェンセン映画の特徴」を明らかにすることを目的とし、映画が制作国内外に対する働きかけをどのようにおこなっているのかを明らかにする足掛かりとしていきたい。

2. ドグマ 95 以降のデンマーク映画とアナス・トマス・イェンセン

はじめに背景となるデンマークの紹介を簡単にしていく。デンマークは、ヨーロッパ地域の北に位置する国である。その国土は、約4.3万平方キロメートルであり、これは日本の九州とほぼ同じ面積だと言われる。人口は、約578万人である⁵。宗教は、プロテスタントの福音ルーテル派であり、これが国教となっている。デンマークの歴史や文化とキリスト教は、切り離すことができないと言われている⁶。その代表的な例として、「デンマーク近代教育の父」と言われるニコライ・フレデリック・セヴェリン・グルントヴィ(Nicolai Frederik

¹ ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』斎藤君子訳(せりか書房、1983年)、ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳(水声社、1987年)を参照とする。

² 小松の研究には「ドライヤーにおけるリアリズムの発生「不運な人々/互いに愛せよ」論」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』2002年48巻77-93頁などがある。

³ 西村(2003)は、「現代デンマーク映画の特徴の一つは、その地域性を強調することよりも、西欧諸国の伝統や文化と連帯しようとする傾向にあるように思われる」[西村、6頁]と指摘している。

⁴ 橋本(2012)は、アウグストの映画に対して、自国の自己表現を排することなく国内と国外を二重に貫く映画表現があることを指摘している。これは、西村が指摘したデンマーク映画の特徴と矛盾しないものである。

⁵ 日本・外務省ホームページ・各国インデックス(デンマーク王国基礎データ)

⁶ 浅野他編、152頁。

Severin Grundtvig 1783-1872)、デンマークのキリスト教会の形式性を批判したセーレン・キルケゴール(Søren Aabye Kierkegaard 1813-1855)、童話作家のアンデルセン(Hans Christian Andersen 1805-1875)、『バベットの晩餐会』を描いたカーレン・ブリクセン(Karen Christence Blixen-Finecke 1885-1962)などが挙げられよう。今日のデンマークにおいても、人口の大半、85%が国民教会(フォルケキアケ)に属している。しかし、自覚的に信仰をもって定期的に教会を訪れる習慣をもつ教会の構成員の割合は3%にとどまっており、世俗化の進んだ国々と大差がないと指摘されている⁷。

次に、近年のデンマーク映画界について概観を説明する。1995年にデンマークの映画監督ラース・フォン・トリアー(Lars von Trier 1956-)らによって始められた映画運動「ドグマ95」⁸以降、デンマーク国外から現代デンマーク映画に注目が集まるようになった。そして、近年のデンマーク映画界には、デンマーク国外に出て制作する流れと、デンマーク国内で制作する流れが見られる。映画制作の場をデンマーク国外に移す監督として、スサンネ・ビア(Susanne Bier 1960-)、ニコラス・ウィンディング・レフン(Nicolas Winding Refn 1970-)などがあげられる。一方のデンマーク国内で映画制作の代表には、本稿で取り上げるイェンセンである。

イェンセンは、1972年にデンマークで生まれた。映画学校に通った経歴はなく、独学で映画制作を学んだ⁹。3作目の短編映画*Valgaften*(英語タイトル*Election Night*)が、1998年のアカデミー賞短編映画賞を受賞した。この受賞以降、脚本家としての仕事を中心に監督としても制作をおこなっている。イェンセンの映画は、いずれも公開年のチケット売上げ(デンマーク国内)において上位に入っている。デンマーク映画研究所のデータによると、*Blinkende lygter*(ブレイカウエイ)は第2位、*De grønne slagtere*(フレッシュ・デリ)は第5位、*Adams æbler*(アダムズ・アップル)は第4位、*Mænd og høns*(メン&チキン)は第2位である¹⁰。そして、『アダムズ・アップル』は、2006年デンマークのアカデミー賞であるロバート賞の作品賞および脚本賞を受賞した。このことから、デンマーク国内においてイェンセンの映画は評価されているとって間違いないだろう。イェンセンが監督した映画は、2019年現在、短編映画3本(表1)、長編映画4本(表2)となっている。日本におけるイェンセン映画の受容状況は、今までビデオスルーや限定的なテレビ配信だけであったが、2019年秋、『アダムズ・アップル』が初めて劇場公開されるに至った。

⁷ 浅野他編、155-156頁。

⁸ ドグマ95のマニフェスト全文は、Det Danske Filminstitut(デンマーク映画研究所、以下DFI)が発行していた雑誌*FILM#Special Issue/Dogme/spring2005*で確認することができる。なお、この雑誌は、DFIのホームページで閲覧することが可能である(<https://www.dfi.dk/node/42753>)。

⁹ Hjort, Mette(Eds.), p.127.

¹⁰ DFIがホームページで公開しているBIOGRAFBILETTER 1976-2018にて、制作国をデンマークに限定し、各年を検索した。

表1 アナス・トマス・イェンセン短編映画

公開年(デンマーク)	原題	
1996年	<i>Ernst og lyset</i>	アカデミー賞ノミネート
1997年	<i>Wolfgang</i>	アカデミー賞ノミネート
1998年	<i>Valgaften</i>	アカデミー賞短編映画賞受賞

表2 アナス・トマス・イェンセン長編映画

公開年(デンマーク)	原題(邦題)	
2000年	<i>Blinkende lygter</i> (ブレイカウエイ)	劇場未公開、ビデオスルー
2003年	<i>De grønne slagtere</i> (フレッシュ・デリ)	劇業未公開、ビデオスルー
2005年	<i>Adams æbler</i> (アダムズ・アップル)	2019年劇場公開
2015年	<i>Mænd og høns</i> (メン&チキン)	2018年にCS放送

3. 『アダムズ・アップル』の分析

『アダムズ・アップル』は、2005年にデンマーク・ドイツ合作で制作された長編映画である¹¹。監督・脚本は、ともにイェンセンが担当した。映画内で使用される言語はデンマーク語である。ここで、簡単にではあるが映画のストーリーを紹介する。

ある田舎の教会に仮釈放されたネオナチのアダムがやって来る。彼はその教会で、更生プログラムに取り組む。アダムの面倒を見るのは、牧師イヴァンである。イヴァンにこの教会でやり遂げたい目標を聞かれたアダムは、咄嗟に「教会の庭のリンゴでアップルケーキを作る」と答える。そしてアダムは、イヴァンや教会に住む他の住人、グナーやカリドとともに様々な困難を乗り越えながら、最終的にアップルケーキ作りの目標を達成する。舞台は、アダムが牧師をしている田舎の教会が中心となっており、教会の他に登場するのは近所にある病院のみである。

ここから『アダムズ・アップル』の分析に入っていく。形式と内容の観点から順に分析していく。形式面においては、登場人物とモチーフをあつかう。内容においては、映画内に見られる現実社会との「ずれ」と登場人物の行動の「ずれ」(鑑賞者が抱くイメージの破壊)を解明したいと思う。

イェンセンの映画は、ドグマ95作品に見られるようなリアリズムを重視した映画とは異なり、ファンタジー要素が強い映画を制作する傾向にある。それは、イェンセンの映画がファンタジージャンルの映画祭に出品されることが多いことから窺うことができる¹²。このよ

¹¹ DFI, Filmdatabasen, Adams Æbler.

¹² 『フレッシュ・デリ』、『アダムズ・アップル』は、Brussels International Fantastic Film Festival (BIFFF)、Bucheon International Fantastic Film Festival (BIFAN)などに出品されている。『メン&チキン』は、Neuchâtel International Fantastic Film Festival (NIFFF)などに出品されている。

うな背景から、『アダムズ・アップル』の分析には、先述のとおりウラジーミル・プロップが提唱した「昔話の形態学」のモデルを用いることとした。

3.1. 【形式】

3.1.1. 登場人物

まず、登場人物(表3参照)を見ていく。『アダムズ・アップル』は、アダムとイヴァンを中心にストーリーが展開する。この映画は、アダムを中心とすると「成長の物語」、イヴァンを中心とすると「復活の物語」が描かれており、この2人の物語の要素が絡み合っている。プロップによれば、昔話には2つのタイプの主人公がいるという¹³。それは、「探索者型の主人公」と「被害者型の主人公」である。この映画では、アダムは「探索者型の主人公」と考えることが可能であるし、イヴァンは「被害者型の主人公」と考えることが可能である。『アダムズ・アップル』は、2つの主人公のタイプを持つことにより、1つの映画内で2つの物語を描いている。また、登場人物たちは、現実社会から孤立した人々として描かれている。アダムやイヴァンはもちろんのこと、その他の登場人物も社会から孤立してしまっている人物として描かれている。これは、マックス・リュティが昔話の特徴として示した「人物やものの孤立化¹⁴」と近い要素だと指摘できるだろう。

このように、『アダムズ・アップル』の登場人物には、プロップによって指摘された昔話の登場人物が持つ特徴に近い要素があることが明らかとなる。

表3 『アダムズ・アップル』登場人物

名前	役割	特徴
アダム	ネオナチ	暴力的、合理的
イヴァン	牧師	親に性的虐待をされた過去、妻が自殺
グナー	教会の住人 (更生プログラム中)	元テニスプレーヤー、性犯罪の前科、アルコール依存症
カリド	教会の住人 (更生プログラム中)	中東系移民、強盗
サラ	教会に来た相談者	妊婦、生まれてくる子どもが障害を持っている可能性
クリストファー	イヴァンの息子	障害を持っている、車椅子生活
コルベア	近所の病院の医師	合理的、非科学的なことを嫌う
ポール	礼拝の参加者	
その他	アダムの手下のネオナチ集団	

¹³ プロップ(1987)、57-60頁。

¹⁴ リュティは、「昔話の人物は親しい人間から離れ、同時になつかしい場所からも離れていく。彼らは孤立した者となって広い世のなかへ出ていく。」[リュティ、91頁]と指摘している。

3.1.2. モチーフ

次にモチーフの分析をおこなう。御伽噺(昔話)的なモチーフとキリスト教的なモチーフのそれぞれを『アダムズ・アップル』の各シークエンスと比較したものが、表4と表5である。これらの比較から『アダムズ・アップル』では、御伽噺(昔話)的なモチーフとキリスト教的なモチーフが重ねられていることがわかる。しかし、御伽噺(昔話)的なモチーフに注目すると、物語の結末はまったく異なる。この映画は、イヴァンがバス停にアダムを迎えに来たところに始まり、最後はイヴァンとアダムが、バス停に次のメンバーを迎えに行くというラストの円環構造を持っている。

登場人物とモチーフ両方を総合して考察すると、現実世界に住む「探索者型の主人公」アダムが、イヴァンの住む教会＝御伽噺(昔話)世界に迷い込み、最終的に御伽噺(昔話)世界の秩序に取り込まれてしまったと考えることが可能だろう。

表4 御伽噺(昔話)的なモチーフ¹⁵との比較 [主人公をアダムと設定]

御伽噺(昔話)的なモチーフ	アダムズ・アップル
家を出る	アダムが出所して教会にやって来る
贈与者(ヤガー)にであう	イヴァンとの出会い
ヤガーの盲目性	イヴァンの盲信的な信仰、現実逃避
森へいき、そこにある家で事件がはじまる。	教会に連れていかれる
兄弟たち＝盗賊たち	グナーとカリド
妹	サラ
難題	目標(アップルケーキを焼く)を決めさせる →様々な困難に見舞われる
主人公の帰還	アダムは教会に留まる(円環構造)
主人公の結婚	なし(グナーが結婚して教会を去る)

表5 キリスト教的なモチーフとの比較

キリスト教的なモチーフ	アダムズ・アップル
神がリンゴを食べることを禁止	イヴァンがリンゴを食べることを禁止
アダムは禁を破って食べる	アダムは禁を破って食べる
知恵の獲得(善悪が分かる)	アダムはイヴァンの自己欺瞞に気付く
「ヨブ記」におけるヨブの試練	イヴァンが信仰を試される(アダムからの暴力をうけるが、抵抗も復讐もしない)
キリストの復活	脳腫瘍と診断されたイヴァンが頭を銃で撃たれたことによって、奇跡的に復活する

¹⁵ プロップ(1983)、プロップ(1987)41-101頁をもとに筆者がまとめた。

3.2. 【内容】

3.2.1. 現実社会との「ずれ」

ここからは、映画外の現実社会とこの映画内の「ずれ」を見ていく。3.1. で確認したように『アダムズ・アップル』の登場人物は、現実社会の人間と同じように様々な問題を抱えている。登場人物たちの特徴のみに注目すれば、リアリズムを追求した映画だという印象を受けるのではないだろうか。しかし、この映画は、アダムに降りかかる非現実的な試練や御伽噺(昔話)のような形式によって、鑑賞者の先入観を裏切る。登場人物の背景と比べ、映画内での出来事は空想の世界の出来事のようにあり、そこに「ずれ」が生まれているのである。

3.2.2. 登場人物の行動の「ずれ」(鑑賞者が抱くイメージの破壊)

次に、アダム、イヴァン、グナー、カリド、サラの5人の行動における「ずれ」を見ていく。登場人物の行動の「ずれ」は、鑑賞者が登場人物に対して抱くイメージの破壊をおこなっている。

アダムは、ネオナチとして描かれているので、風貌はスキンヘッドであり、暴力的な行動を取る。しかし、他の登場人物の行動と比べた場合、かなり常識的な人物として描かれている。ネオナチが一番常識的な人物として描かれることは、鑑賞者がネオナチに対して抱くイメージとずれたものであろう。イヴァンの場合も、表面的には牧師らしい人物のように見える。しかし、映画内で中心となっているイヴァンの行動は、自己中心的であったり、極端に自己欺瞞的であったりする。イヴァンにおいても、牧師とは思えない行動をおこなわせることによって、鑑賞者が牧師に対して抱くイメージをずらしている。グナーやカリドの場合は、アダムよりも先に更生プログラムに参加しており、時折見せる優しさによって更生しているのかと思わせるが、彼らは更生していないのである。サラの場合は、妊娠している子どもに障害があるかもしれないという不安を抱えているのだが、妊娠中にもかかわらず飲酒・喫煙をするシーンが描かれている。

このように、登場人物たちは、その人物に表面的に設定されたイメージと相反する行動を極端な形でおこなっている。『アダムズ・アップル』に見られる現実社会と御伽噺(昔話)の「ずれ」や、登場人物の行動の「ずれ」は、鑑賞者が抱く現実と非現実、善と悪の境界を曖昧にする働きをしているとすることができるだろう。

4. おわりに

本稿の分析によって『アダムズ・アップル』が持つ、多層的なモチーフ(御伽噺、キリスト教、現実世界)、様々な「ずれ」、固定観念の破壊、善悪の境界の曖昧さが明らかになった。特に、登場人物の行動に代表される「ずれ」が、『アダムズ・アップル』の中心を成している。イェンセンは、この「ずれ」によって、鑑賞者に違和感を与えることに成功している。そして、この違和感をもたらす「笑い=ブラックユーモア」が『アダムズ・アップル』の特徴のひとつだと言えることができるだろう。

今後、本稿において詳細な分析ができなかった部分(ネオナチのイメージ、弱い人間がス

トリーを中心を占めている点など)を分析していくことが課題である。なお、プロップのモデルを映画のプロットに直接応用することに対して疑問を提示している研究者¹⁶も存在するのだが、プロップのモデルそれ自体の有効性は認められている¹⁷。したがって、イエンセン映画に適した分析方法として、より適切な方向へ修正していきたい。

¹⁶ ローバート・スタム、ロバート・バーゴイン他(2006) 188-189頁で、デヴィット・ボードウェルによって「形態学的な分析は、歪曲、遺漏、節度なき連想、理論的不適切さによって失敗している。」と指摘されていることが確認できる。[Bordwell, David(1988) "ApPropriations and ImProprieties: Problems in the Morphology of Film Narrative," *Cinema Journal* 27(3):16] 原文の入手が叶わず、孫引きによった。

¹⁷ 「プロップのモデルの応用は十分な成功を収め、研究者たちは、プロット構造の抽象モデルのようなものが草案できると考えるに至った。」[ローバート・スタム、ロバート・バーゴイン他(2006)、188-189頁]。

参考文献

- 浅野仁・牧野正憲・平林孝裕編『デンマークの歴史・文化・社会』（創元社，2006年）
- 西村安弘「デンマークから遠く離れて：デンマーク映画のある種の傾向と日本におけるその受容」『東京工芸大学芸術学部紀要』2003年9号，1-6頁。
- 橋本淳「小国の映画における交渉：ビレ・アウグストの初期作品を例として」『人文論究』2012年62巻2号，105-119頁。
- ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』斎藤君子訳（せりか書房，1983年）〔原書：1946年刊行〕
- ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳（水声社，1987年）〔原書：1969年刊行〕
- ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の研究』斎藤君子訳（講談社，2009年）〔原書：1976年刊行〕
- マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話 -その形と本質-』小澤俊夫訳（岩波書店，2017）〔原書：1981年刊行〕
- ローバート・スタム，ロバート・バーゴイン他『映画記号学入門』丸山修，エグリントンみか他訳（松柏社，2006年）〔原書：1992年刊行〕
- FILM #Special Issue/Dogme/spring2005* (The Danish Film Institute, 2005)
- Hjort, Mette. Eva Jørholt, and Eva Novrup Redvall. *The Danish Directors2*. (intellect, 2010)
- [Web サイト]
- 日本・外務省ホームページ・各国インデックス(デンマーク王国基礎データ)
〈<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/denmark/data.html#section1>〉 閲覧日：2019年11月29日
- Det Danske Filminstitut, Filmdatabasen, Adams Æbler 〈<https://www.dfi.dk/viden-om-film/filmdatabasen/film/adams-aebler>〉 閲覧日：2019年11月29日
- Det Danske Filminstitut, BIOGRAFBILETTER 1976-2018 〈<https://www.dfi.dk/viden-om-film/tal-og-fakta/billetsalg-i-danske-biografer-1976-2018>〉 閲覧日：2019年12月28日
- [映像資料]
- Jensen, Anders Thomas, *Adams Æbler*. (NORDISK FILM A/S.–ET EGMONT SELSKAB. 2005)
[DVD]